

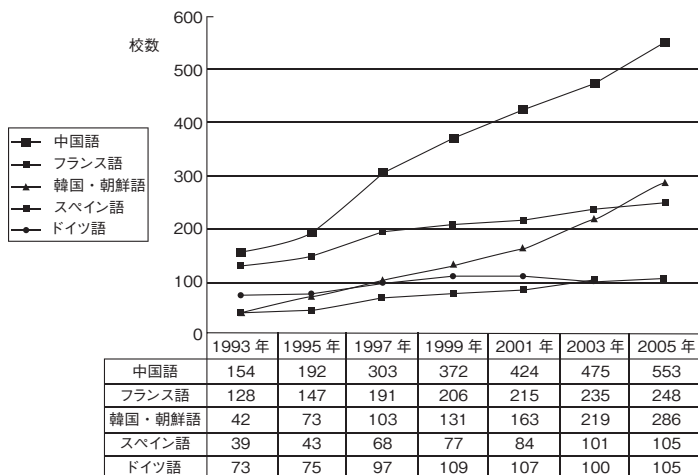
九州沖縄地区における高校中国語教育の現状

堀 地 明

はじめに

2005年4月、長崎県立壱岐高等学校は、全国の高校で初めてとなる中国語専攻を設置した（『朝日新聞』2005年9月18日）。壱岐高校における中国語専攻の新設は、歴史的に中国との交流の窓口であった長崎県ならでわの取り組みであり、九州沖縄地区の地域性を表していると言える。2002年以来、筆者は九州・沖縄地区高校生中国語発表会（2001年より九州・山口地区高校生中国語発表会）の審査委員の任を勤めているが、発表会に参加する高

グラフ 1. 高校における英語以外の外国語科目設置校数の推移



※文部科学省初等中等教育局国際教育課「平成16年度高等学校等における国際交流等の状況について」8より作成。

九州沖縄地区における高校中国語教育の現状

校生の中国語水準の高さに感心し、また発表会を運営する中国語担当の高校教師（教諭講師）の熱意に敬意を感じた。

本稿は九州沖縄地区における高校中国語教育の発展を心より願う立場から、その現状の一端と問題点を明らかにしたい。また、北九州市立大学外国学部外国語学科中国語専攻は、1946年の開学以来、九州沖縄地区において最も長い歴史を有する中国語教育研究機関であり、本研究を高校中国語教育界との連携の可能性を探求する一助としたい。

グラフ1は高校における英語以外の外国語科目設置数の推移を表したものである。中国語開設校数は、1993年以来、諸外国語中で首位、開設校数伸び率も他の言語よりも際立っており、2005年には全国で553校にのぼる。2005年における中国語履修者数は22,116人であり、英語以外の全ての外国語履修者総数48,356人（2005年）の46%となり、フランス語9,427人、韓国・朝鮮語8,891人、ドイツ語4,198人、スペイン語2,688人と比しても、桁違いの巨大な数値が得られる。また、韓国朝鮮語教育の実施校数動向にも注目すべきであり、履修者数ではフランス語に及ばないものの、2005年には実施校数でフランス語を抜いて第二位に躍進している。中国語と韓国朝鮮語の実施校増加傾向は、教育分野におけるアジア重視の反映であり、喜ばしいことである。

表 1. 2005 年度九州沖縄地区の高校における中国語実施校数

	福岡	大分	佐賀	宮崎	長崎	熊本	鹿児島	沖縄	計
公立	13	8	7	7	10	5	5	18	73
私立	4	0	0	2	1	1	1	1	10
計	17	8	7	9	11	6	6	19	83

※各県教育委員会に問い合わせた結果。

表 1 は九州沖縄地区の高校における中国語実施校数の最新のデータであ

堀 地 明

る。2005年度において、中国語は公立と私立を合わせて83校で教えられている。この数値は全国実施校数の15%であり、人口比率から考えると比較的高い数値と言えよう。全8県で実施校数が多い県を順にあげると、沖縄県18校、福岡県17校、長崎県11校である。人口が最多である福岡県での実施校数が沖縄県の実施校数に及ばないことは、沖縄県における中国語教育の熱心さをよく表していると評価できる。また、長崎県の実施校数11校も注目すべきであり、対中交流での窓口であった長崎県の地域の特徴が示されていると言えよう。

下記では、筆者が実施した「九州沖縄地区における高等学校中国語教育の現状に関するアンケート（2005年9-10月）」より得られたデータを提示しながら考察を進めることとする。アンケートは106校に発送し、30校より有効回答を得た。実施校83校中、30校の回答で36%となり、九州沖縄地区における高校中国語教育全般とは言えないが、その一端を示している。この場を借りて、ご多忙の中にもかかわらず、アンケートに協力していただいた各位に御礼を申し上げたい。

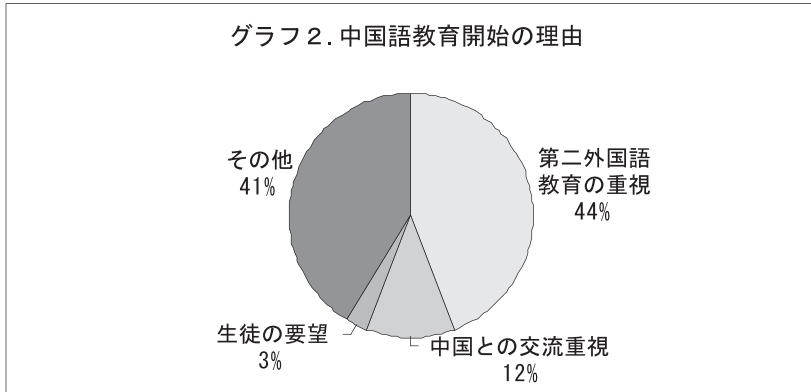
表 2. 九州沖縄地区における中国語教育開始年とその校数

1973年	1986—88年	1992—95年	1996—99年	2001—04年
2	3	4	12	5

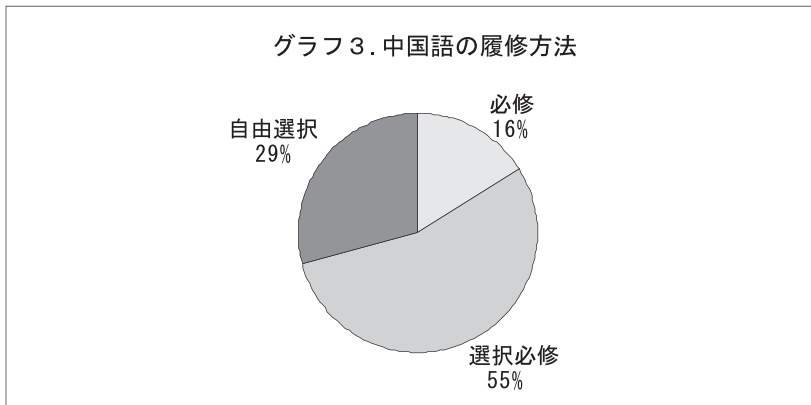
表2は不十分なデータであるが、九州沖縄地区の高校における中国語教育の開始は1990年代後半がピークであることがわかる。回答を寄せていただいた高校の学科を示すと、普通科・総合学科・商業科・農業科・工業科・ホテル観光学科等、まさしく多種多様であり、ある特定の学科のみで中国語教育が実施されているわけではない。開設の理由は学科新設再編時に学校の特色を出すために、第二外国語の一つとして設置されるケースが最も多く、

九州沖縄地区における高校中国語教育の現状

中国語以外の外国語ではフランス語イタリア語韓国語が設けられている高校もある。



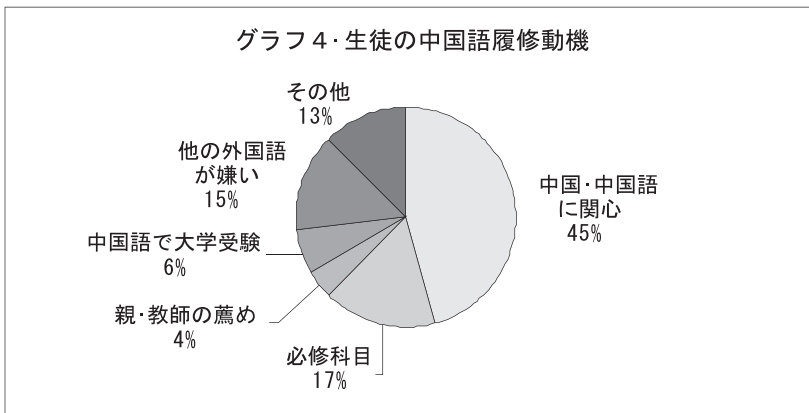
グラフ2より、高校が中国語を開設した理由で最も重視しているのは第二外国語教育であり、次いで中国との交流である。生徒の要望は微少にし過ぎない。アンケートの選択肢には父兄の要請も置いたが、選択した回答は0であった。中国語教育は第二外国語重視という政策の中で実施校数を増加させてきたのである。



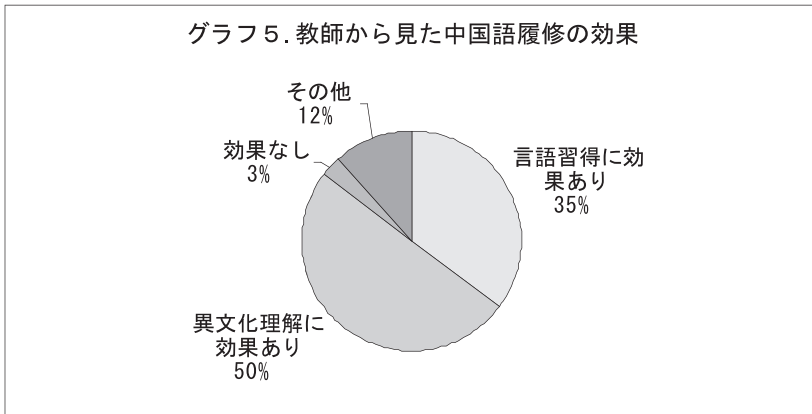
グラフ3より、高校における中国語は選択必修科目としての提供が最多であり、中国語を必修としている高校は16%にしか過ぎない。

中国語を担当している教師については、有効回答のあった30校中、教諭が担当している高校が15校であるが、中国教語員免許状を持っている教員が配属されているのは7校と半分に満たない。中国語担当の教諭は英語・国語・商業・世界史・栄養等科目と兼任している。

講師のみが中国語を教えている高校数は14校である。106校にアンケートを依頼し、一度督促状を送ったものの、有効回答数が30校であった結果は、高校で中国語を教えている教員の圧倒的多数が講師であり、責任を持ってアンケートに回答できる立場にないゆえ、有効回答数30という数値に止まったものと考えられる。高校中国語を現場で支えているのは、不安定な身分の講師であることが察せられる。

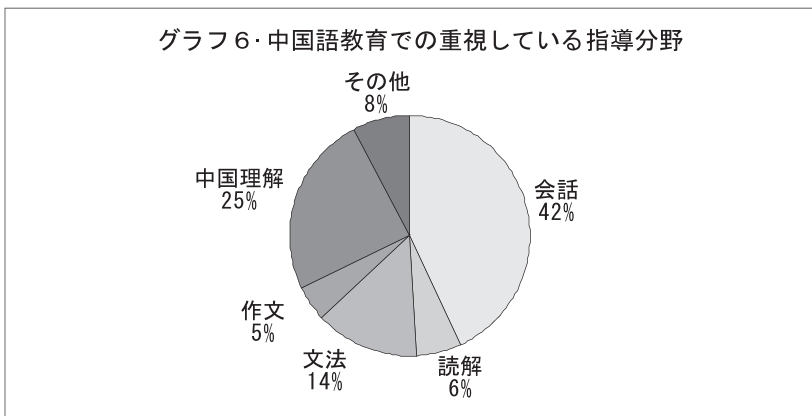


グラフ4より、生徒の履修動機は「中国・中国語に関心」が最多であり、中国への関心の高さが反映している。「中国語で大学受験」は6%であり、第二外国語は大学受験の試験科目としては殆ど生徒の選択肢の中に入っていない。英語と比べると、中国語をはじめとする「第二外国語」は自らの

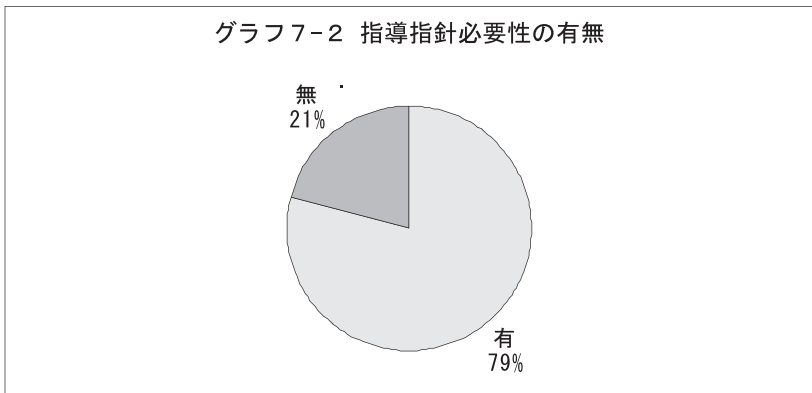
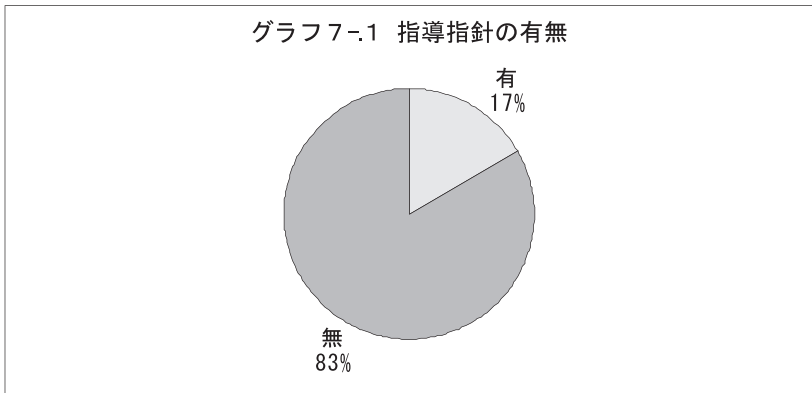


関心に基づき、気軽に学習できる点があるものと想定される。学習時間は週に1コマの授業数が圧倒的に多い。

グラフ5より、教師は生徒の履修効果を高く評価していることが分かる。「異文化理解に効果あり」が「言語習得に効果あり」を15ポイント上回っており、外国語学習が異文化を理解する上で、重要な役割を果たしていることが数値的に明確となっている。

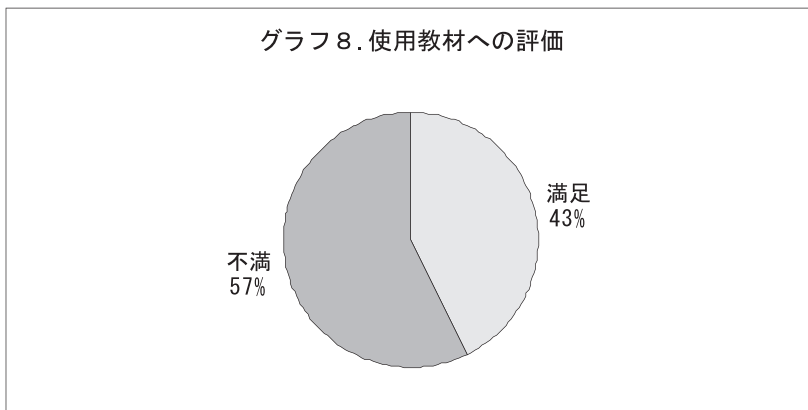


グラフ6より、中国語教育最大の重点が会話習得にあり、次いで「中国理解」である。「文法」「読解」「作文」のポイント合計は「中国理解」と同等であり、これら3分野の扱いは小さい。この点は近年における高校での外国語教育がコミュニケーション重視であることを伺わせるものである。



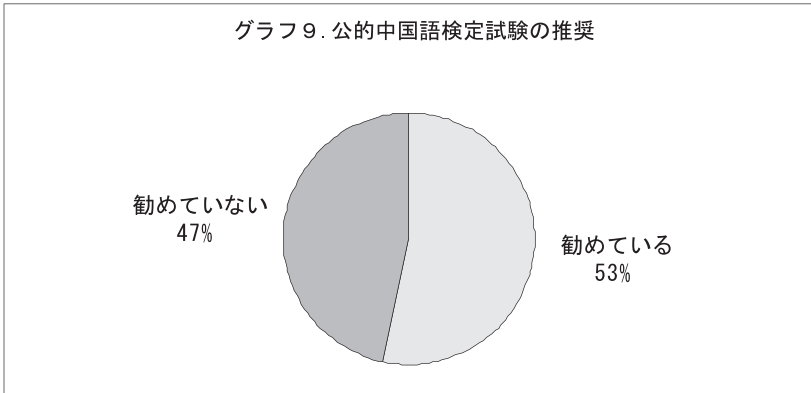
しかし、上表グラフよ7-1より、約8割の教師は指導指針を持たずに教壇に立っており、次表グラフ7-2より指導指針を求める声は大きい。

この点は実施校は増加傾向にあるものの、文部科学省が定める指導要領もない高校中国語教育の問題を数値的に示すものである。

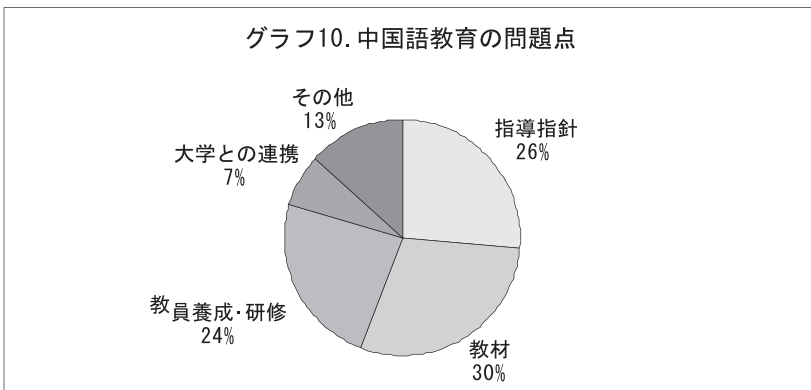


グラフ8より、教師の教材に対する不満は満足よりも高く、指導指針とともに教材面でも問題が露わとなる。これは指導要領が作成されていないことから生じるものである。アンケートより、全国高等学校中国語教育研究会編『高校中国語』（白帝社、1996年改訂版）を使用している実施校は8校、小溪教材チーム編『高校生からの中国語』（白帝社、2002年）を使用している高校が5校である。『高校生からの中国語』は全国高等学校中国語教育研究会が作成した『高校中国語教育のめやす』に基づいているが、必ずしも利用率は高くない。その他の高校は大学の第二外国語としての初級中国語のクラスを念頭に編まれた教科書を使用している。高校中国語教育は、教科書の分野でも問題を抱えている。

アンケート回答より具体的な声を紹介すると、「最新の中国事情をふまえた会話の内容が乏しい」「観光案内も兼ねた教材がほしい」「中国の社会文化風習が分かるDVDや地図写真が豊富な教材が必要」「教授内容を定着させるための練習問題がほしい」等である。

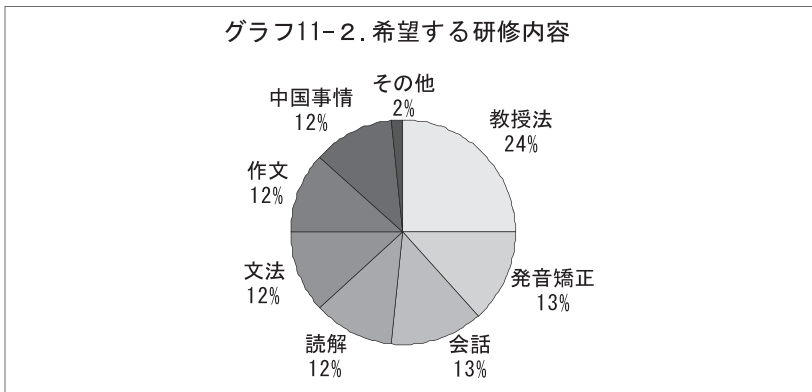
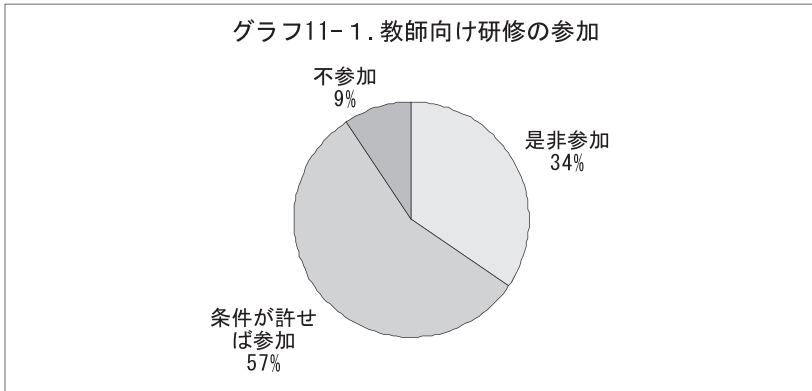


グラフ9より、公的中國語試験の受験を推奨している教師は過半数を超える。現在、日本国内で実施されている中国検定試験は通訳翻訳専門の検定試験を2種を除くと5種ある。すなわち、日本中国語検定協会の中国語検定試験（中検）、中国国家漢語水平考試委員会の漢語水平考試（HSK）、中国語コミュニケーション協会の中国語コミュニケーション能力検定（TECC）、実用中国語検定協会の実用中国語検定試験、日本ビジネス中国語学会のビジネス中国語検定である。推奨の内訳は中国語検定試験が9割を超えており、圧倒的な支持を得ている。



九州沖縄地区における高校中国語教育の現状

グラフ10より教師が認識している中国語教育の問題点は、「教材」「指導指針」「教員養成・研修」の3分野に集約される。「教員養成・研修」の比率は24%と高い。



グラフ11-1より、教員の中国語研修への関心は非常に高いことがわかる。グラフ11-2は研修で希望する内容であるが、「教授法」「発音矯正」「会話」「読解」「文法」「作文」「中国事情」の各分野となるが、「教授法」が最も高いことは教師が平常の授業においてどのように教えるかで苦悩している姿を伺わせる。

調査を振り返って思うに、高校における中国語教育は増加傾向にあるが、担当する教員の身分指導指針教材教員研修等のいずれの分野も未解決な問題が多く、未だに端緒的な段階にある。大学と高校中国語教育界とが手を携えて、問題を解決し高校中国語教育の発展をはかる共同の努力が必要である。

九州沖縄地区における高校中国語教育の現状

九州沖縄地区における高等学校中国語教育の現状に関する調査アンケート

I 貴校について

1-1. 学校名 _____

1-2. 設置形態と在籍生徒数

a) 公立 _____ 人 b) 私立 _____ 人

1-3. 所在県

a) 福岡県 b) 佐賀県 c) 大分県 d) 長崎県 e) 熊本県 f) 鹿児島県
g) 宮崎県 h) 沖縄県

1-4. 設置学科

a) _____ 科 b) _____ 科
c) _____ 科 d) _____ 科

1-5. 中国語圏の高校（高級中学等）との交流提携校

a) 有 校名 _____ 校名 _____ b) 無

II 中国語教育の概要

2-1. 中国語教育を開始した年 西暦 _____ 年

2-2. 英語・中国語以外の開講外国語

a) _____ 語 b) _____ 語

2-3. 中国語教育を開始した理由・目的（複数回答可）

- a) 英語以外の外国語教育の重視 b) 中国との交流重視
c) 父兄の要請 d) 生徒の要望 e) 帰国子女・残留孤児子弟の入学
f) その他（下記にお書き下さい）
-

2-4. 中国語の履修方法

- a) 必修科目
b) 選択必修科目 他の選択科目 _____
c) 自由選択科目
d) その他（下記にお書き下さい）
-

Ⅲ 中国語を履修する生徒について

3-1. 学年別の中国語履修者数

- a) 1年 人 クラス その内、男子 人 女子 人
b) 2年 人 クラス その内、男子 人 女子 人
c) 3年 人 クラス その内、男子 人 女子 人

3-2. 生徒の履修動機（複数回答可）

- a) 中国・中国語に関心があるから b) 必修科目だから
c) 親教師に勧められたから d) 中国語で大学を受験したいから
e) その他の外国語が嫌いだから f) その他（下記にお書き下さい）
-

九州沖縄地区における高校中国語教育の現状

3-3. 教師の立場から見た履修の効果

- a) 言語習得に効果があった b) 異文化理解に効果があった
c) 効果なし d) その他（下記にお書き下さい）
-

IV 中国担当の教員について

4-1. 担当教員数

- a) 教諭 _____ 人 _____ b) 講師 _____ 人
c) ALT[Assistant Language Teacher] _____ 人
d) ALTの出身国・地域 _____

4-2-1. 教諭として中国語を担当している方のみお答え下さい。

- a) 中国語教職免許状も含め、取得した全教職免許状の科目と種類
（一種・専修・臨時等）

- b) 中国語教職免許状を所持していない

4-2-2. 兼任科目の有無

- a) 有 科目名 _____ 科目名 _____ b) 無

4-2-3. 中国語授業時間（コマ）数 週 _____ 時間（コマ）

4-2-4. 中国語の学習歴（複数回答可）

- a) 大学で専攻 b) 大学での第2外国語 c) 留学中に学習
d) 国内の語学学校で学習 e) 母語 g) その他（下記にお書き下さい）
-

4-3-1. 講師として中国語を担当している方のみお答え下さい。

- a) 中国語教職免許状も含め、取得した全教職免許状の科目と種類
(一種・専修・臨時等)
- b) 中国教職免許状を所持していない

4-3-2. 兼任科目の有無

- a) 有 科目名 _____ 科目名 _____ b) 無

4-3-3. 中国語授業時間 (コマ) 数 週 _____ 時間 (コマ)

4-3-4. 中国語の学習歴 (複数回答可)

- a) 大学で専攻 b) 大学での第2外国語 c) 留学中に学習
d) 国内の語学学校で学習 e) 母語
g) その他 (下記にお書き下さい)

4-3-5. 現在の勤務先以外の高校でも中国語を教えていますか。

- a) 教えている 校にて b) 教えていない

V 中国語教育の指導内容・研修について

5-1. 指導上で重視している分野について

- a) 会話 b) 読解 c) 文法 d) 作文
e) 中国の文化・社会事情の理解 f) その他 (下記にお書き下さい)
-

九州沖縄地区における高校中国語教育の現状

5-2. 貴校での中国語教育のガイドラインもしくは指導要領的文書・マニュアル類の有無

- a) 有 b) 無

5-3. 5-2でb) 無の場合と回答された場合、ガイドラインもしくは指導要領的文書・マニュアル類作成の必要性について

- a) 有 b) 無

5-4. 使用教材について

5-4-1. 通年使用の主要教材名・出版社

5-4-2. 副教材

5-5. 現在使用中の教材について

- a) 満足している b) 満足していない
c) どのような教材があれば良いと思いますか。下記にお書き下さい。

5-6. 生徒に公的中国語検定試験の受験を勧めていますか。

- a) 勧めている b) 勧めていない

堀 地 明

5-7. 5-6で a) 勤めていると回答された場合、勤めている試験と目標の級・スコア

- a) 中国語検定試験、目標 _____ 級
- b) 中国語コミュニケーション能力検定試験TECC、目標スコア
- c) 漢語水平考試HSK、目標 _____ 級
- d) その他 _____

5-8. 現在の中国語教育の現状に関する問題点について（複数回答可）

- a) 指導要領的文書・ガイドライン・マニュアル類
- b) 教材
- c) 教員養成・教員研修
- d) 大学語学学校との連携
- e) その他（下記にお書き下さい）

VI 中国語教育の研修について

6-1. 近隣の大学等で夏期休暇期間等に3~4日間の高校中国教師向けの研修会が開催される場合、参加される意志はありますか。

- a) 是非とも参加したい
- b) 条件が許せば参加したい
- c) 参加するつもりはない

6-2. 6-1で a) と回答された方はどのような研修内容を希望しますか（複数回答可）。

- a) 中国語教授法
- b) 発音矯正
- c) 会話
- d) 読解
- e) 文法
- f) 作文
- g) 中国社会事情文化
- h) その他（下記にお書き下さい）

九州沖縄地区における高校中国語教育の現状

6-3. その他ご意見がありましたら、ご自由にお書き下さい。

2005年度北九州市立大学特別研究推進費「九州沖縄地区における高等学校中国語教育の現状に関する調査研究」

(研究代表者 外国語学部外国語学科中国語専攻 堀地明HORICHI Akira、2005年9-10月)